

# 東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち（9）

木 畑 和 子

## 10. ドイツ民主共和国崩壊と統一ドイツ

これまで連載してきた本論文は、今号で最終回となる。連載を終えるにあたって本稿では、インタビュー対象者がドイツ民主共和国（DDR）での生活、DDRの体制、社会主義、DDRでの反セム主義（この問題は前号<sup>1)</sup>でも扱った）、さらに統一（die Wende）後のドイツについてどのような思いを抱いているかを扱う。

インタビュー対象者はキンダートランスポートで家族と別れて出国し、難民としてイギリスで青春時代を送った人々である。出国できなかった家族は殺害された。彼らは、社会主義のもとで新たな国家の建設を助け、ファシズムと闘いたいという積極的な動機でソ連占領地区／DDRに帰国したが、そのDDRも崩壊した。「二度の敗北」（一度目はナチズムによるユダヤ人迫害）ともいえる経験をした人々の生き方を通して、DDRという国がもった意味を考えてみたい。

政治の場やマスメディアなどでDDRが扱われる際、しばしば「不正国家（Unrechtsstaat）」という「修飾語」がつけられる。このインタビューを行おうとしたきっかけの一つは、ユダヤ人亡命者として歴史の激変に遭遇した後、「不正国家論」の中に生きる人々の経験や思いをいかにとらえればよいかを、考えたかったからである。社会主義を信じ、身を投じた人たちの語りや、「不正国家論」の中で、単なるオスタルギーとして冷ややかに切り捨てられ、消えていってしまうように感じられ、それを記録しておきたいと思った。

インタビュー記録から明らかのように、インタビュー対象者の何人か

が、DDR体制に深く失望している一方、他の人たちはDDRの崩壊を強く嘆いている。DDR体制に失望した人々も、統一に満足しているわけではない。DDRはどうあるべきだったのか、そして自分はどうすればよかったのか、彼らは自問する。改めて指摘しておけば、キンダートランスポートでイギリスに渡った年長の子供たちのうち、戦後DDRに戻った人々は、ごくわずかである。大きな決断をして、DDRに戻り、DDRに生涯をかけようとしてきた分だけ、彼らの失望は深いものであるが、それが政治的な「不正国家論」に利用されてしまうのは、彼らにとって当然不本意なことである。筆者に話したDDR批判が活字になれば、全体の趣旨とは関係なく、反DDRキャンペーンに利用されてしまうのではないか、という危惧を抱いた人もいる。本インタビューにはそのような不安が反映されている場合もあることをお断りしておきたい。

2004年にインタビューを開始してから2009年まで毎夏ベルリンを訪ねては、話を聞いたが、連載執筆に時間がかかっているうちに、死亡や病氣などでインタビューが不可能になるケースが多くなった。またさまざまな事情もあり、全員に均一的なインタビューができなかったため、特に本稿は限られた人たちとのインタビュー記録となっている。以下、人名の前の番号は本連載で共通の番号である。これまで扱ってきた①ウルズラ・デーリング、⑤ヘラ・ヘンドラー、⑨ヴェルナー・ヘンドラー、⑩ハンス・ヘルツベルクは、そのような理由から今号では扱っていない。

## ② ヘルガ・エーレルト (1923年生)<sup>2)</sup>

彼女の夫が釈放されたのは1953年だった。その15年後の68年<sup>3)</sup>に彼女はドイツ社会主義統一党 (SED) に入党した。雇用主から戦争のない、すべての人に公正な世界をつくるために闘わないか、と誘われたのだ。彼女の夫は、入党は彼女の気持ち次第だ、自分の思ったようにしなさい、と言ってくれた。彼女はナチの大物やナチの裁判官たちが西でそのままの地位にあることに對し、少なくとも東では再びナチが根を下ろさぬように、闘いたいと思った。彼女はその時期にはまだ党の反シオニズムの方針を感じることはなかった。

夫の死後 (76年)、息子との家族合流のために79年ベルリンに移ったが、そこで友人を得て、ユダヤ教に関心を深めていった。それ以前、彼女はアウシュヴィッツのことや両親が殺害されたことによって、神が信

じられなくなり、ユダヤ人共同体への帰属感も薄れ、ユダヤ人共同体から出てしまっていたが、これは自分でも許しがたい失敗だったという。83年にヘルムート・エシュヴェゲの『Jの印』<sup>4)</sup>を読み、自らのユダヤ人性に目覚めた。彼女の両親とその子供（ヘルガと弟）がライブチヒのユダヤ人宗教共同体メンバーであったことを証明する書類の写しをユダヤ人共同体に送った。これは彼女が100パーセントユダヤ人であることの証明であり、すぐに東ベルリンのユダヤ人共同体に加わることができた。彼女は信仰を取り戻すことはなかったが、ユダヤ教やイディッシュについて学び、その活動に参加するなどして、ユダヤ人共同体が彼女の心の支えとなっていた。そこで、DDR 政府がいかに反シオニズム的政策をとっているかということを知った。

ゴルバチョフ時代に入った87年に、イスラエルに行った。キブツにいる親戚（従兄弟）が以前から招待してくれていたこと、またイスラエルのライブチヒ・ユダヤ人共同体とコンタクトがあったからである。彼女は「嘆きの壁」の前で両親のために祈りをささげ、そしてユダヤ人の国家でユダヤ人として感じたいと思った。およそ50年ぶりにライブチヒ時代のクラスメートにも会えたが、まるで夢ではないかと思った。キブツでも非常に温かいもてなしを受けた。DDR・イスラエル友好協会の会員にもなった。しかし、帰国後、イスラエルについて党の集会で話そうとすると止められた。

DDRでは新聞に書いてあることと、実際とは全く違っていた。彼女は、夫の存命中から、党や政府に対して疑問を抱くようになっていた。プロパガンダと現実の違いを強く感じ、この疑念をDDR崩壊までずっと強くもち続けた。彼女の故郷ライブチヒと祖母をナチから救った偉大な解放者であるとソ連のことを信じたからこそ、入党したわけだが、統一後の91年1月に離党した。統一以前から、DDRは経済的にはすでに終焉しており、政策は矛盾に満ち、自由のないシュタージによる監視社会だった。完全に機能していたのは、保健制度だが、それも経済的基盤が不十分だった。

統一の際、彼女は英語教師として働いていた。当初デモの自由を求める叫びは正当なものとして理解できたし、よりよいDDRの再生になるかと期待もしたが、途中からDDRの国旗が少なくなり、かつての国防軍の旗が混じるようになった。極右がもぐりこんできたのだ。デモ参加者が

ら外国人に対する憎悪や「ユダヤ人は出て行け」、「イスラエルに行け」という叫びを聞いた時、彼女はポーランド系であることもあって、ホロコーストが再び起こるのではないかという不安に襲われた。

統一はショーヴィニズムを伴っていた。一つの祖国、一つのドイツになったという愛国主義的色彩があった。彼女は現在の政府がネオナチの活動に対して、議論を重ねるばかりで、何の対処もできないことを強く批判する。DDR時代には、隠されたかあるいは非常にまれだったのかかもしれないが、反セム主義の動きを感じることはなかった。しかし今は強く感じるという。

ただし、DDRでは、ユダヤ人に対する迫害について学校で教えられることもなく、十分な過去の克服がなされていなかった。自分と同じぐらいの年齢の人間を見ると、その人は自分の父親、母親を殺した人なのかもしれないという思いに襲われることがしばしばだった。彼女の知り合いの非ユダヤ人の中で、「私の祖父がナチ党员だった」、あるいは「父が党员だった」と言った人は誰一人としていなかった。一方若い人たちの中には罪がないのに恥じている人がいるが、若い人たちの罪ではないし、彼らにはどうしようもないことだと、彼女は思っている。

彼女は自らの人生を振り返り、悲劇的な歴史を生きたとはいえ、大変な悲劇的な人生を送ったわけではなく、イギリスでは笑ったり遊んだりしたし、またDDRは自分に仕事を、息子には教育を与えてくれた、という。さらに彼女は、今自分の心はイギリスとイスラエルにあり、もはやドイツに対して何の関心もない。イスラエルには他にも親戚がいることが分かり、また弟も住むようになったため、彼女はしばしばイスラエルを訪問し、イスラエルにも親近感をいだくが、イギリスこそが彼女にとっての故郷である。ナチ時代にユダヤ人のパレスティナ移住を阻害したのもイギリスであるが、キンダートランスポートで自分の命を救い、まだ十代の彼女を包み込み、いろいろ教えてくれたイギリスに対して深い感謝の念を抱いている。イギリスにはDDRや今のドイツにはないような、思慮深さ、寛容さ、人に対する理解というものがいき渡っていた、というのが、彼女のイギリス観である。

### ③ アルフレート・フライシュハッカー<sup>5)</sup> (1923年—2010年)

彼は1975年から89年までボンの「DDR放送」の特派員を勤めた。声

をかけてくれたのは、スペイン内戦の国際義勇軍兵士であり、アウシュヴィッツ強制収容所帰還者で放送局幹部のゴールドシュタインであった。それまでも、中国とハンガリーの特派員の話があったが、同行できる子供は10年生以下という条件があったため無理だった。ボン行きの話の時には、子供は自立していて、その点問題はなかった。もともとは英語力が生かせるロンドン特派員になりたかったが、難民として住んだ国に公的任務のために戻ることはDDRの保安基準にそぐわず、それはかなわなかった。

ボンにはDDRの主要メディアから5人の特派員が送られていた。63年にドイツ連邦共和国（BRD）政府が国家保安上の名目で特派員を全員拘束したことがあったが、75年ごろには状況は変わっており、すべては円滑に運んでいた。

特派員になった75年にデュッセルドルフでマイダネク裁判があった。これは彼にとって、BRDがナチのユダヤ人殺害にどう対峙しているかを直接知る初めての機会だった。裁判はドイツ裁判史上最長の6年間にわたったが、判決は被告12人中4人が証拠不十分で無罪となり、7人は3年半から12年の刑、一人のみが無期だった。

またフランスからのユダヤ人の強制移送を行った元親衛隊三人に対するケルンでの裁判（80年）を経験したが、彼らはフライシュハッカーの両親を移送（42年8月19日）した人々である。彼の両親はギユールの強制収容所に送られていたが、そこからアウシュヴィッツに送られたのだ。ギユールに収容されていた両親から、カナダの収容所にいたフライシュハッカーのもとに助けを求める手紙が届いており、両親がフランスの収容所に入れられたことは当時から分かっていたが、この裁判で彼は初めて両親の運命を具体的に知ることとなった。手紙はイギリスの住所に送られたものが、カナダへ転送されたのだが、もちろん敵性外国人として収容されていた彼には、両親を助けることはできなかった。イギリスの親戚（母の従姉妹）が財産証明を出してくれたら、救出することができたかもしれないのに、その従姉妹はそれをしてくれなかった。

BRD司法は被告たちを守っていたが、資料を丹念に調べたフランス人弁護士をはじめとするフランス側の圧力によって、ようやく訴訟までもちこまれたのだ。彼の両親を移送した列車の担当者は、バイエルンのギェンツブルク市長（CSU選出）となっていた。その市長には懲役5

年の判決が下されたが、3年半服役した後釈放された。この両裁判やその後をみれば、BRDがナチの犯罪者に対して厳しい対処をしているとは決していえないと、彼は断定する。

彼が放送局で定年を迎えたのは、ベルリンの壁崩壊直前の89年9月のことだった。スランスキー裁判（52年）で失職した4週間を除く40年の放送局人生だった<sup>6)</sup>。統一について、彼は、少なくとも80年代初頭まではDDRの社会主義は改革可能であると信じており、体制に無理があると感じ始めたのは80年代半ばのゴルバチョフ時代になってからだったという。彼はいつかDDRに激変が起こると確信をもつようになっていたが、その激変は結局社会主義の破綻という形で訪れた。彼としてはどのように変えることができるか分からなかったが、最後まで、DDRを改革できると信じていた。

DDRについていえば、自分たちが行ったことが全て無駄だった、全て間違っていたというほど批判的ではない。むしろ、自分のしてきたことは100パーセント正しかったと思っている。カナダで強制収容されていた時代から、50年以上も確信をもってかかわってきたことについての批判的検討を避けるつもりはないが、自分の粉々に打ち砕かれた希望や理想が誤ったものであると否定することは、他の人にゆだねたい。またウルズラ・ヘルツベルク<sup>⑩</sup>は、もし社会主義国家建設の実験がうまく行かないことが分かっていたら、帰国しなかったというような思いを述べているが、そのような仮定の話には意味がない。イギリスに残ったら、学者か実業家になったかもしれないが、そんなことを考えるのは無駄なことだともいう。

DDRの問題の一つはオープンな議論ができなかったことだと、彼は考えている。経済において、日常生活において、さまざまな物資の供給が問題となっており、皆それを分かっていたが、そのことについて議論することは歓迎されなかった。またシステム全体の効率を上げる問題に関する議論はDDR指導層が求めたものではなかった。これは経済・文化など全ての分野にわたる。内輪ではよく議論をしたが、それを越えた場での議論はなかった。彼の考えでは、こうしたことが結局はDDRを崩壊に導いたのである。

89年11月4日のアレクサンダー広場のデモに、彼は参加したが、それはよりよいDDRを望む思いからであった。統一という事態になった際

も、彼は二つの国家が、特殊な構造・歴史的状況の下ほぼ40年間蓄積してきたものを、統一に生かすことができる、そこから最良のものを導き出すことができる、という望みを抱いていた。壁崩壊後、ドレスデンで、コールの演説があった時にも、滑り落ちていく感じが分かったものの、まだ希望はもっていた。コールは全ての条件を鵜呑みにしたのだから、2、3年の移行期間などもっと条件をつけることができたはずであると、彼は慨嘆する。

彼は、左翼的な思想が否定され、無にされることへの強い不安を感じ、ナチ時代のように、左翼的な思想が禁止されるような時代が再び登場しないように、警鐘を鳴らしていきたいと考えている。52年の失職に際して、自分自身の良心や勇気よりも、党規を重視してしまった自分を苦い思いで振り返り、市民的勇気（Zivilcourage）が今日よりももっと拡がって欲しいと思っているのである。リスクを負ってでもそれぞれの個人が市民的勇気を掲げもつこと、これが彼が次の世代へ伝えていきたいことである。

#### ④ クルト・グートマン（1927年生）

彼は、1964年から65年、DDR 外国語部（Fremdsprachdienst）に転職したが、その職業的キャリアに決して満足していない。イギリス軍での軍歴に加え、イギリスで働く兄のことも問題にされた。彼は、アメリカは問題外としても、インドでもインドネシアでも、イギリスでもどこか外国で自分の語学力をいかした仕事をしたかったが、外国への赴任はできなかった。それについて、彼が冗談めかして「ドイツのための仕事に就くには、兄も殺されていればよかったのです、そうすれば危険はなかった」と言うと、「よく考えて発言すること、そんな冗談を言うのは党の敵だ」と言われたという。

フィンランドでの会議出張の仕事があった時、当時書記だった自分が同行したほうがよいと彼は思ったが、他の人間が選ばれそうになったので、信頼が得られないならば、仕事をやめると彼は言った。彼は自分の利益のためには闘わないが、不正だと思ったときには闘う、それが自分の生き方だという。結局、フィンランドへは行くことができたが、彼に対して二人の監視役がついた。どこの世界でも馬鹿な人はいるもの、ただしこのような不快な経験はこの時だけだったと彼はいう。

DDRでの自分の生活について、彼は次のように述べる。「DDRでの生活は私にとって快適であり、自分をDDRに同一化してきた。DDRに間違いがあったとしても、システムそのものは間違っていない。DDRの失敗の責任はソ連にあるが、当然それに従ったドイツにもある。資本主義のもつ問題は、今非常によく分かる。私は今でも、社会主義は資本主義よりもずっとすぐれていると思っている。まだ社会主義は完全に実現されたことはないのだ。」

彼にとってDDRでの生活は非常に幸せだったという。ナチの犠牲者として、年金額が加算され、豊かではなかったが、三人の子供たちにそれぞれ十分な教育を与えることができたのである（娘は専門学校をでて税理士、息子二人は大卒）。

DDRにはもちろん問題があったが、よいものがたくさんあったし、多くのことが成し遂げられた。基本的には社会的に公正な国家であり、社会システムも整い、かなりの程度機能していた。女性の平等、保育所、教育政策など今ドイツで努力されていることはDDRでは早くに実現されたことだ。女性にも仕事があり、年金額は相対的に低かったが、住居費も安く、現在のように年金の半分が住居費に当てられるようなことはなかった。休暇制度もとてもよかった。最先端ではなかったかも知れないが医療レベルも高く、子供の死亡率も非常に低かった。それに病院はすべて無料だった。教育システムはフィンランドなどに導入され、PISAでは高い評価を得ている。また人間関係も密で、お互いに助け合って暮らしていた。お互いに信頼しあい、鍵を預けあったりしていた。それに比べ、資本主義はすべてお金で、相互不信の社会だと彼は切り捨てる。

彼はスターリン主義による非人道的犯罪については何も知らなかった。共産主義者は人のために生きると学んだが、スターリン主義は、敵には残酷であらねばならないというロシアの伝統やその歴史からくるのかもしれないという。またシュタージについては、平和維持のために多くの仕事をしたと彼は考えている。情報を入手し公開することによって、戦争が起こるのを未然に阻止することができた。国内でスパイを捕まえることもした。シュタージによる追跡は大変厳しかったが、言われている様な拷問はなかった。今ホーエンシェーンハウゼン（DDR時代にシュタージ本部と刑務所があり、現在シュタージ博物館として一般公開）について言われていることは馬鹿らしいことで、DDRで逮捕されたナチ



が収容されていたところだ。シュタージが厳しかったのは敵に対してのみであった、と彼はいう。

#### ⑥ ギゼラ・リンデンベルク (1925年生)

彼女の夫は仕事上、DDRの将来が見えていたようで、次第にDDRに対して批判的になり、1988年ごろ再び離党した。党の路線に同意しなかったため、除名されたようなものだった。壁崩壊の最後の段階で離党したわけではない。彼女も夫とともに離党した。

離党とほぼ同時に夫妻はユダヤ教への関心を深めていった。それまでは特に熱心なユダヤ教徒ではなく、重要なユダヤ教の祝日のみシナゴグに行く程度で、コーシャも守っていなかった。しかし、86年ごろユダヤ教徒として、ベルリンのユダヤ人共同体に入った。彼女たちが宗教に関心を強めるようになった時期、ちょうどユダヤ人共同体の活動が活発になってきており、興味ある催し物が増え、そのような催し物に多く参加した<sup>8)</sup>。DDR政府が以前ほどには、宗教に批判的でもなくなっていたこともあった。彼女はハンブルク生まれなので、ハンブルクのユダヤ人共同体に書類を出して、彼女が信徒であったことを証明してもらい、また夫はベルリンのユダヤ人共同体に書類を依頼した。ユダヤ教徒はDDR末期には400人程度だったといわれるが、それほど多かったとは思えない、正確な数はわからないが、いずれにせよ本当に少なかった、と彼女はいう。

統一後、彼女はイスラエルに2度行った。息子がイスラエルに住んだためである。彼女はシオニストに対してそれほど批判的ではなく、イスラエルに住むかどうかは息子が決めることだ、という。

DDRについて、彼女は人間の能力には違いがあるにもかかわらず、平等を重視する共産主義に疑問をいだき、また夫の話から統一のずっと以前からDDRはもう長くはないと思っていたが、DDRがもったよさ、医療や福祉の手厚さは大切に思っている。統一後、生活はよくなったと感じているものの、ネオナチの行進を護るために多くの警官が動員されていることなどを強く懸念している。

ベルリンで2005年5月8日にナチの犠牲者と戦争被害者を同一に追悼することに対して、激しい抗議があったことについて、抗議が行われたのは、ナチによる犠牲者のことを考えるとよいことだったと思う。年齢

のことがあるかもしれないが、最近は夜外出するのが怖く感じる。テレビでナチに関するドキュメンタリーが多く放映されているが、やはりナチの問題が矮小化されていて本当の恐ろしさが描かれていないと感じ、もう見ないという。

彼女は自分の人生を振り返って、「悲しいことが沢山ありましたが、楽天的にならなくては生きていけません。ずっと悲しがって生きていくのはだめです。でも同じ運命を共有した夫を失ったことは、強い打撃でした。われわれは稀有といえる、とてもすばらしい関係でした」と言葉を結んだ。

#### ⑦ インゲ・ラメル (1924年生)

彼女は「自分の人生を意味あるもの (nutzlich) にしたい」という信念のもと、労働運動歌文書館館長としての仕事をしつつ、二人の子供を育て、家事をこなしながら、必要とされた場合には名誉職的活動も積極的に引き受けてきた。家裁の離婚裁判などで調停員を30年以上勤めた。また紛争処理委員会 (Konfliktkommission) のメンバーになり、企業と労働組合や、労働者間の争いにおけるアドバイスなどもした。他にも、住居関連の係争問題についての仲裁委員会 (Schiedskommission) の委員にもなった。

そのような彼女は、統一後、すべてがひどい状態となったと感じている。さまざまな分野でDDR出身の学者・文化人たちが一掃されてしまった。彼女自身はすでに年金受給者になっていたが、もしそうでなければ、仕事を失っていたところだった。統一の際には西ドイツ・マルクを喜んだ人が多かったが、あらゆるものがそれとともに失われてしまった。

彼女は、以前は人生・平和・社会の安全を考え、多くの人が仕事をもっている社会だったが、今は常に利益や金銭のことばかり考える全く別の世界となり、非人間的で不安に満ちた社会となってしまったという。彼女は社会主義がもう一度登場することを強く望んでいる。現在のような人権が尊重されていないような状態が続くことはなく、いつか社会主義が再登場すると信じているが、自分の子供や孫たちの代では無理だとは思っている。

彼女によると、DDRが機能しなくなったのは、政府や党の問題だけ

でなく社会構造とグローバル化のためであった。ただし、党にも当然問題があったのであり、DDRでは党が絶対的な力を持ち、中央委員会（ZK）が全てを決定していた。党の絶対的な権力のあり方が、人々の不満や誤った経済政策をもたらした。しかし、SEDの党员であった彼女自身、党のそのようなあり方を批判することはなかった。

そのような自分たちの誤りとともに、冷戦時代であったことが、党の政策に制限を与えたことを考える必要がある、と彼女はいう。シュタージの問題にも冷戦が大きく関わっていた。西側は人々にサボタージュや政府に対する裏切りをさせようと働きかけていたのである。もし、冷戦下でなく、平和の時代に社会主義が建設できていたなら全く別なものになったと彼女は思っている。

統一に際して、DDRの市民人権団体はDDRの優れた部分を統一ドイツにもち込もうとしたが、そうはならなかった。もしそうできたら、統一後のドイツはより民主主義的なDDR的な国家になったであろう。しかしDDRは破壊され、産業は解体され、失業問題が起こった。その結果、経済政策もうまくいかず多額の国債が発行されている。今でも二つの国家がある状態で、一方が他を支配しているような、ひどい状況だと、彼女は慨嘆する。

現在のドイツの政治は一部の人間のためだけの政治となっている。派兵問題にしても、社会政策の後退にしても、支持したくないことが多すぎる。DDRには失業はなかったし、現在のような子供の貧困も存在しなかった。統一後、家も道路もきれいになったが、DDR時代に比べて家賃は10倍近くになった。DDRは社会政策と就業について、非常に大きな成果をあげ、社会的安定があった。企業の保養施設・子供の保育施設なども、経済的負担にはなったが、非常によい制度で社会的な発展を支えていた。社会的、文化的にDDRではより人間のことが考えられていたといえよう。これがDDRを評価する重要な点だという。

彼女は、DDRでは多くのことが統制され、言論の自由がなかったことが問題だったとは思っている。しかし、DDR市民ということに自らのアイデンティティを求めていた彼女にとって、DDRが存在しなくなったことに対する喪失感は強く、「自分にとって第一の故郷は子供時代のドイツです。イギリスは第二の、そしてDDRは第三の故郷でした。でも今のドイツは私の故郷とはならず、自分には故郷がなくなった」と

語る。

「自分を生かしたい」という彼女の生き方は80歳半ばを越えた近年も貫かれている。最近ではパンコウ（そこで89年に彼女は反ファシズム連合を作った）にあったユダヤ人の孤児院についての活動が主となっている。この孤児院の子供たちの一部はキンダートランスポートでイギリスへ出国でき、出国できなかった子供たちのほとんどが殺害された。彼女はパンコウのユダヤ人について著作を6冊出版し<sup>7)</sup>、展示会を開き、孤児院の生存者たちを招き同窓会や講演会を開催した。両親が殺されたためドイツとつながりがなくなった孤児たちも、この同窓会参加で、60年後にようやく再びドイツに足を踏み入れるということになった。

イギリスでの難民時代からずっと反ファシズムに関する仕事にかかわってきた彼女は、このように積極的に活動をし続けている。彼女はいつも何かしらすることがあるから退屈しない、彼女は自分の人生に満足しているという。

#### ⑧ マリアンネ・ピンクス（1924年生）

彼女はDDR時代、フンボルト大学で教育学の上級助手として働いていた。DDRについて、統一後の状況について、彼女はさまざまなことを語ってくれたが、それを要約してみると以下ようになる。

DDRでは、欠点もあったが、それは社会主義国家の建設期であるために起こった問題であると当時は考えていた。DDR政府は自らを社会主義国家<sup>9)</sup>としていたが、民主化の進展が遅れ、次第にDDR体制を批判的にみるようになる人も多かった。知識人たちの中でDDRの最期まで政府を100パーセント支持していたのはごく一部であり、統一に際してDDRの人々は、当初は希望と比較的肯定的な気持ちのなかにあった、と彼女はいう。

彼女は社会主義思想を放棄したり諦めたりしたわけではなかったが、いくつかの展開に対しては失望していた。民主主義的な社会主義を望んでいたが、それは実現されなかった。初期にあった民主主義的な側面の消失は、社会主義建設過程においてはやむをえないことかもしれない、などと考えはしたものの、DDRの最後の数年は不愉快な時期だった。社会主義思想を強く確信してきた彼女は、DDRがよりよい経済的基盤の発展にささえられ、公平と正義が実現される社会主義国家にむかって

いくだろうという信念には変わりがなかった。そういった気持ちを、統一に際して変えなければならなかったことが一番難しいことだった、と彼女は回想する。

彼女は今日資本主義がかかえる問題を見て、やはり DDR は正しかったのではないかとあらためて思うようになった。統一後、BRD は DDR と対抗する必要がなくなったため、社会福祉予算を削るなど、本来の資本主義が再び貫徹してきたのだ。社会主義が挫折したということは受け入れなくてはならないものの、それは資本主義が永遠の勝者であり、それがよいシステムになっていくということは意味しない。世界を巻き込んだ社会主義、人々の希望を実現しようとした社会主義はなくなった。社会主義は信頼を失い、希望の対象ではなくなったのだ。社会主義の実験の結果がどうなるかなど知ることはできなかった。社会主義の形について、明確な未来像が見えていたわけではないが、誰も迫害されることのない、すべての人に機会を与えられる、より公平な社会を望んだだけであると彼女はいう。

DDR には独裁的な面があったことは認めざるを得ないし、彼女自身 60 年代以降批判をもつようになったが、DDR には貧しい人にチャンスを与える社会政策などすぐれた面があり、彼女自身 DDR で素晴らしい歳月を送ってきたという。そうした彼女にとって、統一後 DDR について書かれてきたことは、とても一面的で、それゆえ嘘であるといわざるをえず、純然たるプロパガンダといってもよい。社会主義建設に参画していた人々が、これ程中傷され、侮辱されるとは、統一時彼女は考えてもみなかった。このようなひどい状況が統一後からずっと続いており、これは不正だと思う。DDR に関するドキュメンタリーは事実にもとづいているのだろうけれど、嘲笑するような側面ばかりが強調されており、もう見ない。また、DDR 出身者はシュタージと疑われ、守衛程度であってもシュタージで働いた経歴があればそれが問題視され、失職した人もいる。DDR で、人々はあたかも奴隷のように閉じ込められ、不安のなか、シュタージに監視された生活を送っていた、という偽りのイメージが広められたと彼女は強く抗議するのである。

社会主義国家建設という DDR の試みは、社会主義国家に敵対的で経済的強国の資本主義国家に囲まれた上、経験にも欠けていたため、失敗に終わった。BRD は戦争で兵士を失っただけの豊かなアメリカに支え

られていたのに対し、DDRは戦争で多くの被害を受けたロシアの復興を助けるということもしなくてはならなかったのである。この全く異なった条件下では初めから勝ち目のない競争だった、という。

彼女はファシズムに対して生命を賭して闘った人々に敬意を抱いていたので、父親が「政治は汚い」と政治に関わろうとしなかったのは間違いだと思っていた。そして彼女は自分たちが経験したようなことが二度と起これないようにという思いから、政治活動にコミットしてきた。しかし、今日振り返ってみると、両者にそれぞれ問題があると、彼女は思っている。社会変革をめざす政治活動に加わって新たな体制を成立させても、その体制がさらに大きな体制転換の波をかぶるなどして、危険な思いをするか、何もしないでその時々政権に対して無力であるかのいずれかしかなかったわけだが、いったいどうすればよかったか、と彼女は自問する。ただし、彼女は自分が行ってきた政治活動について、自分はリベラルだったし、不正なことや人に圧力をかけたりするなどしなかったし、後悔することはないという。

彼女は今なお政治に強い関心をもっているが、政治的活動にはいっさい関わりをもたなくなった。今日、何が間違っていて何が正しいのか、もはや分からないと言わざるをえないと語る。統一以降、民主主義が実現するかと思ったが、それも違った。平等のためには、管理・統制が必要であるが、人間の本性は利己的であり、民主主義の達成は難しいのかもしれない。社会主義の誤りは、ファシズムと同様に人々にその理念を強要したことなのだ。どんなに素晴らしいヒューマンイズムの理念でも、実現のために強制したということが誤りで、やり方が問題だったのだ。それはそれで非常に残念なことだった。しかし、現在のように利己主義が貫徹し、一部の人が豊かさを享受する一方で、他の者は貧困においやられるような状況は全くひどいことだ、と彼女は思いをこめて筆者に語った。不公平な世界を拒否し、公平な世界を望む彼女の気持ちに変わりはない。

彼女は、さらにDDR時代の反セム主義について、以下のように語った。

筆者が持参した、何人かがDDR時代の反セム主義を語っている新聞記事<sup>10)</sup>について、彼女は、反セム主義的扱いを受ける人たちは、自身で原因を作っている側面もある、という反応を示した。彼女自身はDDR

時代、反セム主義を経験したことはなく、DDR 国民としても大学でも、ユダヤ人かどうかということは彼女にとって全く関係がなかった。彼女は、人間にキリスト教徒もユダヤ教徒も関係ない、という考え方なので、ユダヤ人であることを隠しも誇示もしなかった。大学の職場ではほとんどの人は、彼女がユダヤ人であったことを知らなかったのではないかと思う程、ユダヤ人にまつわることは口にできなかった。統一後、西がホロコーストについての番組をもち込んでからはじめて、「あなたはユダヤ人だけれど、ナチ時代には大変だったの」と聞かれた。

ただし DDR 時代、身近には次のような経験もあった。子供の通っていた学校で、クラスが騒がしかった時、先生が「いいかげん静かにしなさい！ここはユダヤ人学校か！」としかつたことがあった。彼女が抗議しに学校へ行行ったところ、若い男性教師は大変驚いて、「すみません。口が滑ってしまいました。そういうつもりではありませんでした」と顔を真っ赤にして謝った。「ユダヤ人学校みたいな」というのは「騒がしい」とか、「規律がない」といった意味だ。彼は善良な人だったが、古くからの言いまわしが口をついたのだ。また、子供の国語のクラスでハイネが扱われた時、ハイネのユダヤ人の祖母について話が及び、生徒の一人が「ユダヤ人の祖母って何のこと」という質問をした。それに対し先生は、ユダヤ人とは「髪が黒くて、鼻がこう曲がっていて」と教えたという。長いナチ支配の後、そこで教え込まれたことからの脱却には時間が必要だ、と彼女は思っている。

#### ⑩ ウルズラ・ヘルツベルク (1921年－2008年)

彼女は、1977年検事職を引退した後、82年までヘルシンキの世界平和委員会での翻訳業務についていた。89年9月アレクサンダー広場で大規模なデモが行われた時、これでよりよい DDR になるのではないかと考えた。ゴルバチョフが社会主義システムの何かを変え、また他の国々もそのような変革に倣うのではないかと思ったが、ソ連自体が崩壊してしまった。社会主義体制内での改革は非常に難しいということは分かっていたものの、まだ希望はもち続けていたが、それも統一によって完全についでってしまったと、彼女は回想する。

彼女の、DDR に対する批判は厳しい。彼女は、イギリスと DDR を比較して、イギリスは資本家の国家で、不正も貧富の差もあるが、民主

主義国家といえるのに対し、DDRは民主主義的ではなかった、と強調する。労働者に共同決定権があったにもかかわらず、その権利は執行されなかったし、経済計画もすべて上が決定したもので、プロレタリアート独裁とはとてもいえず、党の独裁だった。DDRやソ連、ハンガリー、ポーランドのようなやり方で社会主義が機能しなかったのは、十分な民主主義がなかったためである、と彼女は考えている。

一方、彼女は統一後の状況を肯定するわけでもない。現在のドイツは党独裁の代わりに資本の独裁の下にあり、芸術家も常に対価を考えており、経済が存在のすべてを規定していると、彼女は強い不満を抱き、次のようにDDRのもっていたよさを指摘する。DDR時代には失業はなかった。これは非生産的で非効率的な人員配置と表裏一体をなしていたことは認めざるを得ないが、仕事はあった。現在のように明日は仕事なくなるのではないかと、金銭的な心配をしたりするのは全くあやまっている。DDRにあった機会の平等、たとえば教育に関する平等の機会など、今は存在しない。DDRでは贅沢こそできなかったが、衣食住は安定していた。

さらに彼女はDDR時代と統一後について彼女の二人の息子に即して語ってくれた。長男<sup>11)</sup>はジャーナリスト、次男<sup>12)</sup>はロック歌手である(他に女優・演出家で演劇学校教師でもあった娘がいる)。彼女によれば、イギリスの民主主義を経験した亡命者に育てられた子供は、DDRの学校生活にうまく適応できなかった者が多いのではないかという。ドイツは臣民根性と同調精神が非常に強いが、彼女は先生の期待通りの答えでなくとも自分の思ったことを言うように、うわべを偽るようなことをしないように子供を育てたという。そのように育てられた子供は学校生活に適応するのが困難だったようだ。息子たちはDDRに対して批判的であったので、壁崩壊を歓迎していた。しかし、統一後、長男は彼女同様BRD政治に対しても非常に批判的なため、原稿をもち込むのが難しいし、ロック歌手の次男はDDR時代には検閲を受けるような立場だったが、旧西側のロック歌手との競争が激しく、歌う機会がほとんどなくなってしまった。

彼女は、社会主義というものは、そもそも体制としてうまく機能させることができるものなのかどうか分からなくなったといいつつ、機能しなかったことには大変落胆したという。社会主義は結局ユートピアでし



かなかったのだ。このことは、彼女に強い衝撃を与えた。母親を殺したドイツに対して、どうしても許す気持ちをもてず、結局ドイツに完全な一体感をもつということもできなかったにもかかわらず、そのユートピアのためにこの国で生きてきた。しかし理想は現実とはならなかった。検事として若い世代を教育し変えていくことができるなどということも、幻想だった。

彼女はDDRの終焉は歴史的必然であったと思っているが、それでも、DDRの40年が全く無駄であったとは考えていない。また彼女は統一後、ソ連やスターリンのことをより多く知ることによって、党から離れたが、自分の理想を諦めたわけではない。より公正で理にかなった世界を望む気持ちはそのままだ。人間社会には改善が必要なのであり、すべての人々が生きる価値をもてるような世界をつくるために、闘い続けることは意味があることだ、と彼女は熱をこめて語った。

豊かな人間はより豊かに、貧しい人々がますます貧しくなっている、現在のような資本主義世界は変えていかなくてはならない。解決策は分からないが、また今日明日で人や世界を変えることはできないが、環境問題にせよ、労働者の給与にせよ、ゆっくり一歩ずつ変えていかなくてはならないし、またそれをあきらめてはならない。もう自分が経験することはないだろうが、歴史は続いていく。その中で解決策が見つかるかもしれないし、見つけなくてはならない、と彼女は強く主張する。

最後に、統一前（86年か87年）にホルスト・ブラッシュが主催した自由青年同盟FDJ（英）の初めての同窓会についての、何人かのFDJ（英）メンバーの意見を紹介しておきたい。ブラッシュは文化省副大臣まで勤め、FDJ（英）のメンバーの中でも、最も出世した人物である。ヘルツベルク⑩やピンス⑧は、ブラッシュがFDJはドイツで創設されたという偽りをそのままにしていたことに対する抗議の気持ちで参加しなかった。ヘルツベルクは特に、FDJ（英）はイギリスにおけるナチ抵抗運動と位置づけられるべき活動を行ったと、強調する。それにもかかわらず、その歴史はFDJ「創設」をホーネッカーの功績とするために、闇に葬られたままにされてしまったというのである。他方ゲートマン④は、これでようやくFDJ（英）の人々が、DDR社会から信頼できるメンバーであると認められたとして、歓迎の気持ちをもって、参加し

たという。

インタビュー対象者の方々には、聞き違い、思い違いを避けるため、何度も繰り返し、遠慮なくさまざまな問いを發した。私のドイツ語の粗末さも重なり、高齢の方々にはさぞや大変だったと思う。また私からの質問には思い出したくないこと、語りたくないことも多く含まれていたと思う。このインタビューが静かな老後を送る人々の気持ちをかき乱したのではないかとささか不安になることもあったが、この方々は非常に忍耐強く答えてくれた。心より御礼を申し上げたい。

本連載を終えるに際して、インタビュー対象者のみならず、下村由一氏、渡辺玲奈氏、Monika Goldschmidt氏、Beate Kosmala氏、Annette Leo氏、Irene Runge氏、Karsten Schröder氏、Barbara Thielmann氏をはじめとする多くの方々の援助を得たことを、あらためてここに記して感謝したい。

#### 注

- 1) 「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち(8)」(『成城文藝』第211号、2010年)。
- 2) エーレルトに関する記述は、インタビューの他、Robin Ostow, *Juden aus der DDR und die deutsche Wiedervereinigung. Elf Gespräche* (Berlin, 1996), 185-197で構成したものである。
- 3) 彼女は「六日戦争」(67年6月)以前とも言っているので、68年はおそらく言い間違えであろう。Ostow, *Juden aus der DDR*, 187.
- 4) ヘルムート・エシュヴェゲはパレスティナへ亡命し、キブツに入ったが、反シオニスト的な共産黨員であったため、追放され、戦後DDRへ帰国した。しかし、自らをドイツ人ではなく、ユダヤ人であるとする彼の姿勢が、党の方針から逸脱しているとして、文書館での下働きのような仕事しか与えられなかった。Walter Laqueur, *Geboren in Deutschland. Der Exodus der jüdischen Jugend nach 1933* (Berlin/ München, 2000), 237, 267; ヴェルナー・ベルクマン他編/岡田浩平訳『「負の遺産」との取り組み オーストリア・東西ドイツの戦後比較』(三元社、1999年)、379-380頁。
- 5) フライシュハッカーに関する記述は、インタビューの他、Survivors of the Shoah. Interview with Alfred Fleishhacker (1996年3月21日収録、ビデオ)とAbschied und Heimkehr(1996年11月16日放映、WDR製作)、およびHeide Riedel (Hrsg.), *Mit uns zieht die neue Zeit....40 Jahre DDR-Medien* (Berlin, 1993), 191-198, 305で構成した。
- 6) 彼は49年から55年まで「ドイツ放送」、55年から68年「ベルリン放送」、

68年から75年は「DDRの声」に勤めた（「ドイツ放送」は「ベルリン放送」に属しており、後「DDRの声」へ名称を変更した）。

- 7) Inge Lammel, *Jüdisches Leben in Pankow. Eine zeitgeschichtliche Dokumentation* (Berlin, 1993); *Jüdische Lebensbilder aus Pankow. Familiengeschichten-Lebensläufe-Kurzporträts* (Berlin, 1996); *Das Jüdische Waisenhaus in Pankow. Seine Geschichte in Bildern und Dokumenten* (Berlin, 2001); *Stätten jüdischen Leben in Pankow. Ein Rundgang* (Berlin, 2001); *Jüdische Lebenswege. Ein kulturhistorischer Streifzug durch Pankow und Niederschönhausen* (Berlin, 2007); Inge Lammel et al. (Hrsg.), *Verstörte Kindheiten. Das Jüdische Waisenhaus in Pankow als Ort der Zuflucht, Geborgenheit und Vertreibung* (Berlin, 2008).
- 8) 1986年5月ベルリン (DDR) のユダヤ人共同体の集會に、初めて共同体メンバー以外のベルリン在住ユダヤ人が招待された。なお、DDRでは88年のホーネッカーの対ユダヤ人政策転換まで、ユダヤ人独自の催しを一般に知らせることは厳しい制約下におかれていたが、それもゆるみ始め、ベルリンでは86年以降、ユダヤ人共同体のメンバーとそれ以外のユダヤ人がともに参加する活動が計画され、次第に活発化していった。この活動は、壁崩壊後のベルリン・ユダヤ人文化連盟 (90年1月) 創設につながった。連盟は「統一に傷ついた」ユダヤ人たちに新たなよりどころを与えるための社会・文化活動や、ロシアのユダヤ人の入国・統合問題などに積極的にかかわっていたが、創設20年目の2009年に活動の幕を閉じた。Ralf Bachmann/Irene Runge (Hrsg.), *Wir. Der Jüdische Kulturverein Berlin e.V. 1989-2009* (Berlin, 2009), 11-14, 101-144; ベルクマン編著『「負の遺産」との取り組み』、381-382頁。
- 9) 1952年 DDRは「社会主義国家建設」を宣言した。
- 10) Die Geschichten der anderen. Juden erzählen aus ihrem Leben in der DDR (*Berliner Zeitung*, 16./17. Juni 2007) のアンドレ・ヘルツベルク (ウルズラ・ヘルツベルク⑩の次男) やザロメア・ゲニンなどに対するインタビュー記事。「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち (8)」、69-70頁参照。
- 11) 長男の共著は邦訳出版されている。ラインホルト・アンデルト、ウォルフガング・ヘルツベルク/佐々木秀訳『転落者の告白 東独議長ホーネッカー』(時事通信社、1991年)。
- 12) 新聞の人物紹介によれば、アンドレ・ヘルツベルクのバンド（「パンコウ」）はDDR時代、もっとも有名なロックバンドの一つであった。*Geschichten der anderen* (*Berliner Zeitung*).

## 追記 1

本稿の校正中、ピンスクス氏⑧からDDRにおける反セム主義について自分の

経験を語ったものだけでは、誤解を招く恐れもあるのではないかと、補足コメントが送られてきた。以下の3点がその要約である。

1. DDRでは、ナチ時代の政治的被害者（共産主義者）が最も重視されており、ユダヤ人迫害の方は、あまり眼を向けられてこなかった。
2. 反セム主義的な表現が犯罪として取り締まりの対象となるなど、DDRでは国家の政策として、反セム主義の発展が抑えられた。ただしDDRの親パレスティナ政策は、反セム主義を再び喚起することになった。
3. DDRのユダヤ人たちの多くはユダヤ人共同体に登録しており、社会主義国家の一員としてのアイデンティティよりも、ユダヤ人としてのアイデンティティを強く感じていたのではないかと思う。そのような人々は反セム主義的な動向に敏感であった。しかし、自分たちのように社会主義を信じ、新たな社会建設に参加するために帰国したユダヤ人は、反セム主義をほとんど感じない環境で生きてきた（スターリン時代の反セム主義は除く）。

最後にピックス氏は「当時の私たちの進歩信仰、理想主義、ナイーブさにはただ悲しみをもって、微笑むことしかできないが！」と、そのコメントを結んでいる。

## 追記2

同じく校正中、フライシュハッカー氏の訃報が伝えられた。フライシュハッカー氏はイギリス時代からFDJ（英）グループの指導者的立場にあり、本稿のインタビュー対象者のほとんども氏が紹介してくれた人たちである。彼の語り口は、それまでの職業人生がそうさせるのか、そのまま文章として記事にできるようなものであり、きわめて印象的であった。また氏は高齢でありながら、インターネットを駆使し、筆者のメールでの質問にもすぐ返事をくれるなど、非常に活動的な人物であった。この集団ポートレートも氏の協力がなければ、ありえなかった。心よりお悔やみ申し上げたい。享年86歳。

（本稿は2010年度成城大学文芸学部特別研究助成金による成果の一つである。）